思考プロセスのビジュアル化を導入した英語ライティング授業—論理的思考能力の育成を目指して

An English Writing Course Assisted with Visualized Thinking Processes—Challenging for Enhanced Logical Thinking Abilities

金岡 正夫

Masao KANAOKA

世界的IT革命に伴い英語ライティング教育は単なる作文から欧米論理に相応したコミュニケーション手段にその役割を確実に移している。が、その一方で日本人学生の批判的思考、論理的表現能力の低下が社会問題となっている。そこで思考プロセスのビジュアル化を導入した新たなライティング授業を試みた。これは海外に通用する系統的な論理展開と洞察的な思考の育成を目指すものである。

キーワード：ライティング、思考プロセス、ビジュアル化、論理的表現能力、コミュニケーション

Amid the global revolution of information technology (IT), the role of Japan's English writing education has substantially shifted its mission to how to nurture Japanese college students' thinking skills focused on Western logic, rather than conventional logic-missing composition instructions. Meanwhile, such students' critical thinking and logical explanation skills have apparently been lowered, posing a serious social issue as a result. A solution would be an introduction of newly-designed English writing course emphasizing visualized thinking processes, since this approach can be effective in nurturing each student's consistent logical development and insightful thoughts both indispensable for Western-eyed practical communications.

Keywords: Writing, Thinking Process, Visualization, Logical Explanation, Communication

1. 緒言

1.1 コースの策定背景

「考えること」が苦手な学生が増えている。物事を批判的に捉え、自分の意見を論理的に述べる表現力がかなり不足している。粗雑な論文構成や短いながらも聞き手にとって要領を得ないプレゼンテーションが目につくようになった[注1]。母語の日本語ですら上手く使えない、分かりやすい文章で表現できない、そのための論理的思考能力が備わっていない若者たち。これに対して「考えて表現する、それを厭わない、おっくうに思わない」機会、訓練を与えることは急務である。

英語授業に関して言えば米国など英語圏特有の論理構成プロセスや表現方法を学び、それにある程度習熟させることは必須課題と言える。少なくとも実社会に巣立っていく大学レベルでは習得させる義務がある。国際化とIT（情報技術）革命に伴い、国境を越えた大学間の学術交流は日々盛んとなり、海外の学会に出向いて聴講や発表の機会が与えられる大学生も増えつつある。事実すでに体験し、自身の乏しい語学力のみならず、欧米の聴衆に適合した表現方法や論理構成がま

ずかった点を反省する学生が身近に出てきた。

語彙や文法学習に対する暗記能力ではなく、論理的思考能力がコミュニケーション上必要である。体系的に類推や思索を深めていくアプローチが必要である。そのためには自分は今「何を考えているのか」「どのように考えているのか」「なぜそう考えるのか」といった「自己との対話」、換言すれば「疑問への芽生え」が求められている。畢竟疑うことと考えることは思考能力育成のための両輪である。

しかしながら独力では本質的思考能力は育たない。また、実社会に対応できる即戦的能力を育成することも難しい。他者を考察し、それに対する疑問や批評・批判を自分の言葉で投げかけていく姿勢がまず必要である。逆に外（他者）から自分はどのように映っているのか、自身の考え方をどのように理解しているのかを聞いて教えてもらう、その理由を尋ねてみることも大切である。それによってお互いの考えがはじめて深まり、批判や論理の育成を目指した相互コミュニケーションが成り立つ。それを意図した訓練、体験が英語授業でも導入されるべきである。それを抜きにして、

つまり学生同士が仲間相手に疑問や批判的姿勢を確立できない内から海外の聴衆相手に「自分の考え」を論理的・体系的に訴えることはまず不可能と思われる。

1. 2 コース目標

以上の事由をふまえ、コース目的/教授目標を最初に設定した。大別すると：(1)疑問をベースにした批判・批評的表現の育成[聴衆または読み手の立場から]、(2)自分の考え・意見に対する体系的・論理的説明方法の習得[話者または書き手の立場から]、(3)それを実現するためのストラテジー(対処法)の学習と応用実践[英語ライティング授業の観点から]、以上の3項目である。(1),(2)はコミュニケーション上欠かせない思考能力(批判的および論理的思考能力)育成を、(3)に関しては実際の職場でプロのテクニカルライターたちも行っている「書きながら考えをまとめていく」テクニクの習得を意図した。これら3つの目標に照準を合わせ、以下の企画・立案(教材作成、コースカリキュラム策定ほか)および実践(パイロット授業)を試みた。

2. 対象学生と教材選定

2. 1 対象学生

鹿児島大学共通教育カリキュラムにおける目的別選択英語科目「英語オープン」(平成12年度前期開講/週1時限=90分/工学部2年生対象)の1つを担当した。コース名を”Technical Communication”とし、欧米人が用いるlogic(論理)やstyle(文体)、およびケース・スタディに基づく実践的なライティングプロセスを話し合いと作業演習中心に学習してもらうことにした。クラスメート(他人)のライティングを批評する一方、自身の論理展開や文章スタイルの問題点を指摘してもらうcritique形式をベースに、深く考える力の育成と書いてみる習慣の確立を目指した。事前の開講科目紹介、シラバスなどを通して今回76名の学生(機械20/電気・電子1/建築18/応用化学16/海洋土木9/情報工学2/生体工学10)が履修登録した。

2. 2 教材選定

幅広い工学科より受講者が集まったこともあり、教材内容や講義の話題は全員に身近なテクノロジーを選んだ。加えて工学分野で活躍する人物にも焦点を当て、その人の人生体験(現在の職業に至るまでの経緯)、仕事への誇りと情熱、社会や環境との関わり、人生観、教育観などを幅広く紹介することにした。裏を返せばモノ、ヒト、それぞれの題材を通して「考えてもらう」ことを企図した。ある種の感心、共感のもと、「考えてみたい」と個々の受講者が自発的に思うような教材作りがここでのポイントとなった。世間の動向・関心事に耳を傾け、インターネット等で最新情報を検

索・収集しながら今日の学生が目を向けてくれる、考える気になってくれる対象(物、人)は何かを考えた。

結果、モノについては自動車業界のリサイクル技術開発(ホンダが開発したリサイクル可能なダッシュボード)を選んだ。題材はインターネットよりダウンロードした英文ニュース記事(ロイター発給)で、内容はコンパクトでA4サイズ1枚程度に収められていた。多少の専門用語は入るものの、情報量・内容レベルともに学生たちに十分理解できる範囲だった。10段落(各段落：2-3行程度)のテキストスタイルは各段落の内容および段落間の論理展開が解り易く構成されており、ライティング技術指導にも最適と判断した。

一方、ヒトについては建築家の安藤忠雄氏に絞り込んだ。自然と人間との共生を真剣に考え、日本や諸外国の伝統文化を大切に思う建築家。他方、東京大学教授として教育者の側面も持ち、自身の重厚な体験と世間に対する深い洞察心をもとに、勉強、仕事、人間としての在り方、生き方等、独自の観点から若い世代へ語りかけている。その鋭い眼差し、感性、豊かな発想と並外れた行動力は他人を魅了するものがある。ある種の憧れと同時に共鳴、共感を促す何か漂っている。単なる感心、感動に止まらず、自分自身の生き方、将来像、職業観などを含めて真剣に考える機会、それを安藤氏は「自分さがし」に悩む若者たちに投げかけている。

モノとヒト、その共通キーワードとして「環境」を意識した。環境保護への取り組みや自然環境を巧みに復元した都市計画、生活環境づくりはすでに市民レベルの課題となっている。もはや身近な日常問題と化している。急速な都市化と自然破壊、希薄化した人間関係、確信が持てない自身の将来像など、これらは若者を巻き込んだ、またはその可能性を含んだ深い問題である。ともに考えなければならない、学生たちに考えてもらいたい点である。

一方、実践的なライティング技術を理解、習得してもらうため別の教材も用意した。“Style Tips”シリーズと名付け、主に科学技術英語で不可欠な文法解説と用例を項目別(分詞構文、関係代名詞、受動態など)に取り上げた。加えて実際の文章をより理解し易い、解読し易い文章スタイルに書き直すediting workshopコーナーもこの教材に盛り込んだ。具体的にはRichard Lanhamが自著“Revising Prose(4thed.)”の中で提案しているParamedic Method(PM)、およびJoseph M.Williamsが著した“Style:Ten Lessons in Clarity and Grace(6thed.)”[資料1]を参考に、読者の立場から読みやすい、理解し易い文章スタイルのルール解説も載せた。

Paramedic Method (PM) by Richard Lanham

1. Circle the prepositions
 2. Circle the "is" forms
 3. Ask, "Where's the action?" "Who's kicking who?"
 4. Put this central action in a simple active verb
 5. Start fast—no slow windups
 6. Write out each sentence on a blank screen or sheet of paper and mark off its basic rhythmic units with a "/"
 7. Mark off sentence lengths in the passage with a big "/" between sentences
 8. Read the passage aloud with emphasis and feeling
- (source: *Revising Prose* [4th ed])

Style: Ten Lessons in Clarity and Grace by Joseph M. Williams

1. The key to a thoughtful style: Write from the point of view of your readers; they probably know less than you do about what you are asking them to read, so you must be clearer than you think you have to be. (Lesson One)
 2. The key to a correct style: Write not as the grammarians say you must, but as writers you admire actually do. (Lesson Two)
 3. The first key to a correct style: Put your important characters in subjects, and to the degree you can, make those subjects short, specific, and concrete. (Lesson Three).
 4. The second key to a clear style: Join those subjects to verbs that express specific actions. (Lesson Four)
 5. The keys to a cohesive and coherent style: Begin sentences with information familiar to your readers, end them with information that is new and unpredictable. In a series of several sentences, focus their subjects on a consistent set of concepts. (Lesson Five)
 6. The key to an emphatic style: End your sentences on your rhetorically most salient, most powerful, most grammatically heavy words. (Lesson Six)
 7. The key to a pointed style: Cut, cut again, then cut once more. (Lesson Seven)
 8. The keys to a shapely style: Get to the verb in the main clause quickly by keeping introductory phrases and subjects short, by avoiding interrupting elements between the subject and verb. Extend the sentence not by tacking one subordinate clause on to another, but with running modifiers and coordinated constructions. (Lesson Eight)
 9. The key to an elegant style: Write clearly, create balanced and parallel phrases and clauses after the subject; make those phrases and clauses echo one another's sounds, structures, and ideas. (Lesson Nine)
 10. The key to an ethical style: Write to others as you would have others write to you. (Lesson Ten)
- (source: *Ten Lessons in Clarity and Grace* [6th ed])

資料1 パラメディックメソッドおよびスタイルに関するルール

3. シラバス&コースカリキュラム

平成12年4月14日に最初の講義をスタートし、夏期休暇前の前期試験に至るまで合計11回のセッションを行った。これは事前に確認しておいた、最低限可能な講義回数だった。コースガイダンスを行った第1回目よりセメスタープロジェクトを提出してもらう最終回までのコースカリキュラムを緻密に策定した。基礎から応用・実践レベルに至る各セッション(90分)の講義ポイント、理解目標、そして作業内容をリスト化する一方、それらをThinkingとWritingの2つの領域から整理区分した[資料2]。つまり「考えること」「書くこと」各々の特性、学習内容を峻別し、双方の作業を体験してもらうことで両者の密接な連携、および系統的な思考・作業プロセスの必要性を認識してもらうことを目指した。

3.1 Thinkingについて

Why (なぜ), how (どのようにして)を機軸に、考える、または(考えたことを改めて)考えてもらう機会を設定するよう努めた。一例として最初の講義時に

情報伝達の効率性について触れ、伝達形式が日本と米国では具体的にどのように異なるのか、その理由はなぜか、一方で書き手と読み手とでは「伝える情報」と「受け取る情報」との間で誤解や認識のずれが生じるのはどうしてかなどを考えてもらった。日米間の異文化や国民性、それに基づく表現・伝達様式の相違、その一方で伝える目的(書き手)と伝えてほしい内容(読み手)との認識的な隔たりなど、多面的角度から考えてもらうことにした。

考える訓練の一環としてケース・スタディも採り入れた。特定の課題を提示し、主にライター(書き手)の立場から提示された問題をどのように分析、整理した上で伝達様式・論理構成を行うべきか考えてもらった。1つの情報(例えばリサイクル技術開発に関する英文記事)を与え、その中から必要、不必要な情報を設定した特定読者に合わせて選別してもらった。読者の専門的知識、職場での部署、その情報の使用目的と使用場所などを考慮した上での情報選別に加え、最終的にどのような段落構成にリフォームすべきか、なぜ

Session	Topic / Goal		Handout (配布教材)	In Class (90 minute)			Assignment
	T: Thinking	W: Writing		講義 point	作業	Critique	
1 st	T	情報伝達の目的、効率性について	リサイクル技術 関連記事 (和文、英文)	audience analysis	各段落の内容要 約		英文記事の和訳 (記事調に)
	W	逆ピラミッド型論理構成法の理解	5W1H sheet 他	Top-down の情 報伝達方式	5W1H と段落間 の連携確認		
2 nd	T	能動態と受動態の印象の違い (読者の立場から)	技術英語におけ る能動・受動態 の使い分け解説 他	効果的な能動・ 受け身表現	Handout 各例文理解	Session 1 st Assignment の 交換・批評	リサイクル英文 記事の1段落要 約化(W 作業)の 完成
	W	5W1H を意識した英文要約作業の 特質		問題のある 英文スタイル	リサイクル記事 の1段落要約化		
3 rd	T	特定読者(目的)に合わせた情報精 選と論理展開	ケーススタディ および 3-paragraph をベースにした 英文論理展開他	対象読者の具体 的分析方法	分析シートの 記入、完成	Session 2 nd Assignment の 交換・批評	ケーススタディ に沿った 3 paragraph 英文(W 作業)の 完成
	W	特定の目的を伝達するための 段落構成法		各段落の役割	3 paragraph 英文作成		
4 th	T	目的・理由説明のための論理展開 &レトリック	自己紹介文作成 の解説と作業方 法、 Style Tips 他	レトリックの役 割と具体例	自己紹介に載せ る情報・内容	Session 3 rd Assignment の 交換・批評	自作の自己紹介 文(英文) draft (W 作業) 完成
	W	段落間の繋ぎ表現(語句)の 役割		段落づくりと 簡潔な文体	自己紹介文の 段落構成		
5 th	T	4 th Session のつづき	Style Tips 配布 (Paramedic method[PM] 解 説他)			Session 4 th Assignment の 交換・批評	論理、文体両面 からの自己紹介 draft の書き直 し(W 作業)完成
	W			PM による 英文書き直し	自己紹介 draft の書き直し		
6 th	T	特定人物の描写・解説ルール (読者の観点から)	安藤忠雄関連資 料&ビデオ 他	必要情報の分類 化	資料読解 ビデオ鑑賞	Session 5 th Assignment の 交換・批評	安藤氏に関する Why, How 中心 の問題提起 (英文) (W 作業)完成
	W	Why? How? を用いた、その特定 人物への質問事項の考案		疑問による洞察 力の深化	安藤氏に関する Why, How 提起		
7 th	T	複数の特定読者層に対する 論理展開、レトリック	brainstorming とケーススタ ディ(セメス ター プロジェクト) 解説 他	複数の読者分析	読者のニーズ 分析	Session 6 th Assignment の 交換・批評	安藤氏に関する brainstorming (英語) (W 作業)完成
	W	brainstorming の役割と作成方法 [ビジュアルプロセス 1]		Brainstorming による情報精選	安藤氏に関する brainstorming		
8 th	T	逆ピラミッドスタイルによる 論理構成 [ビジュアルプロセス 2]	inverted pyramid style sheet & 安藤氏追加資料 他	1 paragraph = 1 idea 1 sentence = 1 meaning	安藤氏に関する 英文作成のため の論理展開・段 落構成の検討、 スケッチング	Session 7 th Assignment の 交換・批評	英文原稿前の論 理展開・段落構 成の検討、スケ ッチング (W 作業)完成
	W						
9 th	T	フローチャートによる 文章間の論理的・内容的つながり [ビジュアルプロセス 3]	flow chart sheet 他	文章間の整合性 (論理・内容)	各センテンスの key point, key word (英 語)をまとめて 繋ぎ合わせる	Session 8 th Assignment の 交換・批評	安藤氏に関する flow chart sheet (英文) (W 作業)完成
	W						
10 th	T	内容・情報量のバランス化 (均整のとれた段落構成) [ライティングプロセス]	semester project 完成用 writing sheets 他	英字新聞・雑誌 に盛られる バランスのとれ た段落構成と内 容・情報量	特定読者層への 安藤氏紹介文 (英文)完成 * ビジュアルプ ロセスを参考に	Session 9 th Assignment の 交換・批評	セメスタープロ ジェクト (W 作業)の完成
	W						
11 th	T	安藤氏に関するセメスタープロジ ェクト提出 (ビジュアル&ライティング)	プロジェクト (ライティング) 模範解答、 授業評価アンケ ート	コース全体総括		Session 10 th Assignment の 交換・批評	
	W						
前期試験 (90 分)	出題内容: コース全体を通しての学習&作業内容の理解確認 * すべて持ち込み可(辞書・講義資料・提出課題)						

資料2 コースカリキュラム概要(各セッションの内容ーThinkingとWritingの観点から)

それが効果的と言えるのかなどクラスメートと話し合いながら考えてもらった。

Thinking and communication practice (思考と伝達の演習)はcollaborative work (共同作業)を基本とした。つまり自分と相手、換言すれば書き手(writer)と読み手(reader)もしくは編集者(editor)という最小単位のコミュニティを形成し、まず自分の考えを伝え、意見・理由を交えて相手に批評してもらい、改めて考える、考えさせてもらうという自発思考、能動思考を助成する機会を設定した。身近な相手に自分の考えが伝わるか、理解させることができるか、逆に聞き手(audience)、読み手(reader)あるいは編集者(editor)として明快な批評、助言が行えるか「双方の立場」を体験してもらうことにした。

3. 2 Writingについて

基本的に機械的な作業、暗記を基本にした文章作成法と対峙する形を取った。理由は実際のライティングに入る前に、その段階に至るまでの「軌跡/思考過程」の大切さを理解してもらうためである。換言すれば自身のライティングの欠陥(論理展開、文章表現ほか)を指摘された場合、頭の中で考えながら雑然と書き直すのではなく、そのベースとなる思考過程をまず段階的、系統的に検証してもらう態度(これこそがプロフェッショナルライターとしての基本的アプローチと考える)を養ってもらうことを最優先課題とした。このような科学的・脱感覚的方法、つまり問題箇所に戻って検証し直し、改善を加えて再度ゴールを目指すといった反復のプロセス(recursive process)は、米国のテクニカルライティング授業等で指導されている。自分や他者の問題点に気づくため、敢えて疑いながら読む態度、確たる理由をもとに批判する姿勢をその授業から学んでいるのである。

その点を踏まえ、一つの方策として「ライティングのビジュアル化」を今回導入することにした。コンピュータソフトを用いて緻密で彩り豊かな文書に仕上げるのではなく、思考内容・思考過程をより「簡潔・単純な形で表現」していく作業の採用である。理由は思考のプロトタイプを学生各自で形成してもらうこと、それをもとに実際のライティング作業に活用してもらうためである。1つの手法としてブレインストーミング(brainstorming)を学生たちに紹介した。それ以外にフローチャートや逆ピラミッド型の図形など、ライティング教育で実践応用されている手法も解説し、実際それらの作業もしてもらった。

口頭で表現するのは難しい。が、思考が完全にまとまっていない、整理されていない状態でも話しながら考えをまとめあげ、補足説明を加えて相手に説明する

ことはできる。同時進行が許される。要するにアドリブが効く。しかしビジュアル化されたもの、紙に書かれたものはそうはいかない。ドキュメントの完成/提示に際し、余分な内容、冗長な部分、混乱や誤解を招く表現すべてを削り落としながら思考内容・プロセスの結晶化作業(crystallization)を完遂しなければならない。何度も書き直ししながら考えを簡潔化(clarification)する緻密で地道な作業が欠かせない。それは経験豊富なプロのライターでも行っている。その事実を念頭に地道な作業を体験してもらうことにした。

たとえば各学生が書いた英文(例:自身の人生モットー、就職を含めた将来目標、現在打ち込んでいる事、今の大学と専攻学科を選んだ理由などを載せた自己紹介文—アメリカ人企業家を想定読者に設定)が具体的にどのように、どの程度シェイプアップされるべきか、可能なのかを一連の書き直し作業(4回程度)を通して理解してもらった。段階的な書き直し作業(論理構成~文章スタイル)によって問題点および改善方法を系統的に理解してもらうことがこのrewrite, shape up作業の目的である。そこで自身の論理構成・文章スタイルの問題点発掘と具体的改善方法に習熟してもらえるよう、例文(たとえば建築専攻のA君—架空人物—書いた英文)を用意した(注:語彙・文法レベルは学生に合わせた)。LanhamのPM, WilliamsのTen Lessonsに基づき、A君の自己紹介文の問題箇所をロジックやスタイルの観点から指摘し、解決策を提示した。これを”editor's comments”コーナーと名付け、論理的に不具合、情報不足、説明不十分など、コミュニケーション上の重大問題(大きな部分)からセンテンスレベルでのミス(小さい部分)に至るまで、A君の幾度かの書き直しに併せて段階的な解説を入れていった[資料3]。

この教材を通して、学生個人が自分のライティングスタイルの問題点、習癖などを認識し、修正する力を養ってもらうのみならず、editorとして他者の文章スタイルの問題点を客観的に見抜き、具体的な批判、批評ができるクリティカルリーダー(critical reader)になってもらうことを願った。

4. 90分授業への取り組み(講義と作業内容)

ThinkingとWritingを基本に以下の流れで毎回セッションを行った。

- (1)当日の授業概要説明(講義・作業内容および目的の概説)[5分]
- (2)前回の課題提出および交換(クラスメート間)[critique][20分]
- (3)当日の講義資料と作業用教材の配布および講義内

(155 wds)

wr^{ack}/vague/unclear conclusion!

二 be 動詞
 ○ (K₁)
 一 to 不定詞
 受受受 Passive voice
 □ 關係詞

editor's comments on stylistic problems

[style]

- ・ be 動詞の使い過ぎにより各文が単調な上、リズムが間延びして歯切れが悪い。{PM 1}
- ・ 前置詞が多く見られる。関係代名詞、関係副詞も数カ所見られ、これらも文を長くしている。同じ意味で短い単語に置き換えると理解し易くなる。{PM 2}
- ・ 殆どの文は S+V+C/O の能動態だが、文単位で内容(contents)を見ていくと、writer's point が文の後半にきているケースが目立つ。Writer 自身のことを述べているのだから、"..." から始める文を繰り返す必要なし。「核心部分」を先にもってくるべき。{PM 3}
- ・ "is to..." といった be 動詞+不定詞の形が気になる。これも単調。他の単語表現を用いて shape up を図りたいところ。{PM 4}

[logic & rhetoric]

- ・一番最後に結論(conclusion: the purpose of this essay)が来ている。これでは reader/audience は困惑し、苛立つのでは。(PM 5)
- ・"Why?" (なぜそうなのか?) と問いたくなる文がある。reader を納得・同感せしめる reason/facts (理由・事実) を述べること。これは異文化が要因とされる、日本人ライターの重要欠点の1つとされている。

資料3 “editor’ s comments” を載せたライティング教材（一部）

容・ポイント解説 [Thinking] 30分

(4)配布教材を使ったライティング作業[Writing][30分]

(5)次回セッションまでの課題指示と連絡 [5分]

(1)については5分程度で切り上げ、(2)の共同作業、critiqueに早速入ってもらった。完成した課題（主に前回のセッションで取り組んだwriting作業教材）をクラスメートと交換し、writerとreader/editor（書き手と読み手/編集者）の関係となって短いconference（話し合い）をしてもらった。約20分間与え、その両方を逐次体験してもらった。

いわゆる peer-editing job と呼ばれるこの critique 作業で, reader は相手の完成した課題を読みながら批判的態度で質問や意見, 助言を述べる一方, writer は具体的理由を交えてそのように書き上げた経緯を説明し, 必要ならば反論してもらうことを促した. 次に reader は editor となって具体的な問題部分に直接マ

ーク（例：アンダーラインや符号など）を記入し、講義で教えたediting phrase（編集用の語句）一以下参照一を書き添えるよう指示した。

先に触れた自己紹介文（英文）を例にとると、大学や学科専攻の理由説明が不十分だったり、かつて努力した事例と現在の状況とを結ぶ論理的接点が見いだせない、つまり論理的整合性が欠落している点はないかなど大きな点から点検してもらった。その上で問題箇所のマーキングを行い、“need more information（もっと情報が必要）”、“explain more in detail（もっと詳しく説明せよ）”、“confusing logic（論理が混乱している）”などのediting commentsを付記してもらった。

次に文体レベルで点検を行い、たとえ文法的に正しい文でも長すぎたり、冗長な表現になっていたり、あるいは挿入句や句読点の多用により読解の混乱を招

く文にはそれぞれ”too long,” ”redundant,” ”confusing” など書き入れるよう指示した。さらに文章間のつながり(cohesion)に問題がある場合、その間を埋める僅かな内容、または繋ぎ言葉の必要性を示唆して”for instance (例えば)?” ”put some more words (もう少し言葉を付け足して)” など書くよう促した。

Editing最後の仕上げとして、2-3行程度で全体的なコメントを書いてもらった(日本語)。その際、reader/editorから見て感心した点、writerとして自分も参考にしたい点など、まずよかった点を述べてもらい、併せて問題点(論理的観点と文章スタイルの両方)も具体的に(問題箇所を例示しながら)明記してもらった。決して悪い所だけ見るのではなく、良い点は大いに褒め、writerのモチベーションを高めてあげることがeditorの大切な仕事である。その点を考慮し、問題箇所についてはeditorとして具体的な助言・提案を例示してwriterに文の書き直し、論理構成の練り直しを進めてもらうよう促した。

(3)においてThinking, Writingそれぞれに合わせた資料や作業用教材を配布した。Thinking, Writingの導入・基礎レベルとして第1回~5回目までのセッションでは系統立ったマテリアルを準備した。主として環境・リサイクル技術を扱った和英両方の新聞記事(和文、英文)ならびに英文記事を論理・スタイル両面から考察・分析するための教材がそれである。それとは別に科学技術英語で重用される文法事項(現在・過去分詞、関係代名詞など)の解説、ライティングにおける4Cs(clear, concise, concrete, correct), LanhamのParamedic Method, WilliamsのTen Lessonsなどを扱った実践ライティングシリーズ(先述した”Style Tips”シリーズ)を随時配布した。

(4)の講義・解説でそれらの資料や教材を用いて学生たちのThinkingモチベーションを促し、その後、実際のWriting作業へと連動的な流れを作った。ここで白紙(blank sheet)を常時配布した。ThinkingとWritingのスケッチをしながら課題完成へのwarm upをしてもらうためである。クラスメートとフリートーキング、ディスカッションを交えての作業は時間的に30分を限度とした。よって講義時間内にライティング作業を終了し、課題完成までには至らない。むしろこの時間にクラスメートとの情報交換、批評のやりとりを行いながら徹底したインキュベーション(incubation)作業—思考の整理、構想のビジュアル化(スケッチング)、および英文テキストのドラフト(下書き)—に集中してもらった。一つの試みとしてリサイクル技術(ホンダ技研工業がリサイクル可能なダッシュボードを開発)に関し、オリジナルの英文記事を理解した

のち、1つのケースを課題提示した。つまり、この記事をも特定読者(専門知識をもたないが環境問題に興味を示す主婦)に読ませる場合、どのような情報は不要となるか、また、論理展開を含めた情報の流し方はどの程度リフォームすれば読み手に優しい、reader friendlyなものになるか自分の考え・論理構想をスケッチしてもらった。それをクラスメートと交換し、批評しあうことでライティングモチベーションを高めてもらった。

(3),(4)に対して各30分の作業時間を設けたが、thinking, writing各々において個人差が当然現れた。よって未完成部分は自宅でのホームワークとし、最終的には完成した課題を次回のセッションで提出してもらい、クラスメート間で交換してcritiqueおよびpeer-editing job作業に入ってもらった。基本的にこのローテーションを毎回繰り返した(セッション終了後に課題提出物を回収)。

5. セメスタープロジェクト: ANDOを題材にしたケーススタディ

5.1 ケーススタディの策定

Thinking & Writing 訓練の総仕上げとして、学生たちが異文化・異業種の特定期読者層に適切な情報を論理・スタイルの両面において的確に伝えることができるか、それをセメスタープロジェクトとして検証することにした。具体的には建築家および教育者としての安藤忠雄氏をアメリカ人の学生(建築専攻で入門レベル)並びに学校教師(中学・高校レベル)に紹介するというケースを設定。その際、これら複数の読者層に違和感なく的確で有益な情報を提示できるか、換言すれば論理的な思考レイアウトをベースにshape upされた英文スタイルが構築されるかをセメスタープロジェクトのゴールとした。上記の建築専攻の学生たちは建築家TADAO ANDOのキャリア・偉業・建築観念を知らない一方、学校教師は自然、環境の大切さや人間としての自立(自己責任、自己依存など)を身近で解りやすい形で自分たちの生徒に教えようとしている。双方の読者の関心、ニーズを読み取り、効果的な英文ドキュメントを作成することが重要であり、そこで以下の関連補助教材を準備した。

5.2 プロジェクト関連補助教材—思考プロセスのビジュアル化とライティング作業に向けて

安藤氏に関する資料教材を収集/配布した。具体的には、(1)「青春の道標」(安藤忠雄氏の自伝エッセイ: 日本経済新聞、日曜版2000年1月9日~3月26日まで連載)、(2)「想い、強く」(同氏のエッセイ: 雑誌「太

陽」, 平凡社出版, 2000年2月号に掲載), (3)「STUDIO」(建築専門誌“DOCUMENT EXTRA 01: TADA0 ANDO”—A. D. A. EDITA Tokyoより1995年出版—でのインタビュー対談部分), (4)「淡路島プロジェクト」(同専門誌より抜粋), (5)「Tadao Ando」(東京大学研究協力部主催フォーラム“UT Forum 2000 in Boston”での一部資料)の5点である。

(1),(2)は日本語, (3),(4)は日英対訳, (5)は英文となっており, (1)と(2)に関しては建築, 教育, 人生論を中心に一部英訳を施す一方, (5)については一部日本語解説を補足した。また, ビデオ教材(安藤忠雄氏をフォーカスしたTV番組「情熱王国」, 平成10年9月6日放送分の録画)も使用した。

最初にビデオ(約30分間)を流し, 安藤氏の人間像, ライフワークとしての建築(観)と彼独自の教育観, 人生観などを紹介した。建築専攻の学生を含め, 多数の受講生が安藤氏を知らなかったことに正直驚いた。が, かえってその事が, 学生たちの安藤氏に対する新鮮な興味・関心へとつながった。約70名の学生は終止真剣にモニターに見入り, 終了後も暫く沈黙が続いた。

一方, 課題完成に向けた段階的作業教材を配布した。最終的にはいくつかのパラグラフに集約された論理的な英文を提出してもらうことだが, そこに至るまでライターとして欠かせないthinking&writing作業(思考プロセスのビジュアル化とライティング)を段階的・系統的に進めてもらうワークシートを作成した。大きくは(1)brainstorming sheet,(2)keywords list,(3)inverted pyramid sheet(逆ピラミッド型論理構成シート),(4)sentence flowchartの4点である。

(1)の作業で建築家・教育者としての安藤氏に関するキーワードをできるだけ出してもらい, それらの関連性を探り出してもらった。この作業に不慣れな学生も多いのでbrainstormingのサンプルも用意した[資料4]。各自のbrainstorming作業で出てきたキーワードをまずリストアップし, それらの関連情報を資料教材(英文)からもしあれば抜き出し, 転記してもらうのが(2)の作業である。(3)でドキュメント構成(タイトル, 必要パラグラフ数とパラグラフ間の論理展開など)の考えをイラスト化してもらい(注: 1 paragraph=1 ideaをベースに絞り込んでもらった), その後(4)を使って各パラグラフにおける文章間の内容的つながり(cohesion)を 1sentence=1meaningを念頭にフローチャート化してもらった。これらのビジュアルプロセスを経て, 最後に実際の英文ドキュメント完成に向けたライティング作業に入ってもらった。

(1)~(4)の各段階ごとにcritique/peer-editingの機

資料4 Sample of Brainstorming (建築家・教育者安藤忠雄氏に関するキーワード)

会を講義中に設け, いつものようにwriterとreader/editorの関係に立って学生同士で問題点の指摘, 助言などを行ってもらった(思考プロセスのフィードバック作業)。例えば(3)の場合, パラグラフ数の問題, および最終パラグラフに至るまでの論理展開の整合・不整合性などをクラスメートと話し合ってもらい, その間, 机間巡視しながら質問を受け付けたり助言を行った。

これらの系統的思考作業プロセスおよび書き直し作業も含めて最後に完成したドキュメントを提出してもらった。その際, (1)から(4)の作業プリントも「記録」として添付してもらった。理由はビジュアル化された一連の思考形成過程と完成した英文ドキュメントとの「同一性」を検証するためである。実際, この2点を比較考察することは興味深かった。というのも, (1)から(4)を通して十分にビジュアル化された思考プロセスを構築できた学生は, 最後のライティングでも論理的に完成度が高く, 情報提供も的確で読み応えがあった。逆に不十分なビジュアル記録しか提示できなかった学生は, ライティングも短く論理的, 内容的にも不十分なものに終止した。つまり読者のニーズ, 関心に応えられるドキュメントとは言い難かった。畢竟, 徹底したthinkingプロセスがwritingにいかにより不可欠な要素であるか, 学生のみならず筆者自身も再確認できた良い機会となった。

6. 成績評価

最初の講義で詳細なコースシラバスを配布し, 総合成績算定基準を明記した。出席20%, 平常(課題提出およびセメスタープロジェクト)40%, 定期(前期)試験40%とした。課題, プロジェクト, および定期試験は

基本的にA～Dのletter gradesで評価した。なお、試験については全て持ち込み可（辞書、講義での配布物）とし、コース全体で学習作業してきたことを「腕試し」してもらう内容を出題した。一例として1パラグラフの英文を提示し、英文スタイル上の問題点を具体的に指摘すると同時により簡潔な文章に書き直してもらうediting能力を試験した。さらにwriterとしての論理展開、ドキュメント作成能力を試す意味で3種類程度の英文記事を用意し（専門用語および一部語句には日本語訳を付記）、予め指定された特定audience（読み手）とそのニーズを明記した。その上でそれらに適した英文ドキュメントを論理構成、文体などに配慮しながら作成するよう指示した。なお、文法、語法ミスなどは今回のコースゴールに則し、試験、課題、プロジェクトの全てを通して採点・評価対象から外した。

7. 授業評価および反省点

コース終了時に独自の授業評価アンケートを行った。結果、63名の受講生より回答が寄せられた[資料

5]。週1回の講義ゆえ、ほぼ毎回課題（次回セッションまでに完成、提出）を指示した。クラスメートの批評・助言をもとに考えて書く、または書き直す作業の繰り返しだったためかなりの負担となり、その辺りの不満が数字にも現れている。加えて、クラスメートだけでなく、講師からのediting,助言などのフォローがもっと欲しかったというコメントも多く寄せられた。実際60名以上もの課題を毎回細かくチェックし、添削していくことは難しく、コースの半ば頃に全員のwriting,editing両方の進捗状況を点検するのが精一杯だった。多人数のライティングクラスゆえ、個々の学生への細かいフォローには限界があり、学生諸君には迷惑をかける結果となった。一方では書き直し・考え直しの繰り返し作業をベースにした編集作業という感想も寄せられ、writing=rewriting & rethinking,つまり書くとは書き直しと再考の繰り返しプロセスであることを認識しつつもある種のフラストレーションを抱く学生も見られた。

しかしながら今回のコース設定、教授目標に理解を示してくれる意見も様々寄せられた。安藤氏を用いた

下記質問項目に対し、該当する箇所に○をつけて下さい。(%)：小数第一位四捨五入

	質問項目	強く思う	思う	普通	思わない	全く思わない
1	興味惹かれる講義内容	8 (13)	23 (37)	23 (37)	7 (11)	2 (3)
2	役立つ講義内容	19 (30)	31 (49)	9 (14)	4 (6)	0 (0)
3	わかりやすい講義	8 (13)	23 (37)	24 (38)	6 (10)	2 (3)
4	使用教材(prints)の有益性	10 (16)	31 (49)	15 (24)	7 (11)	0 (0)
5	適切な授業進度	5 (8)	22 (35)	25 (40)	11 (17)	0 (0)
6	適当量の課題	2 (3)	8 (13)	21 (33)	23 (37)	9 (14)
7	板書の分かり易さ	1 (2)	15 (24)	34 (54)	11 (17)	2 (3)
8	適切・公平な質問がされた	5 (8)	24 (38)	24 (38)	9 (14)	1 (2)
9	毎回の講義目的は明快だった	20 (32)	23 (37)	14 (22)	6 (10)	0 (0)
10	この講義を他学生に勧めたい	9 (14)	23 (37)	19 (30)	8 (13)	4 (6)
11	peer-editing 作業は役立った	9 (14)	23 (37)	26 (42)	5 (8)	0 (0)
12	深く考える力、洞察力が養われた	9 (14)	21 (33)	29 (46)	4 (6)	0 (0)
13	logic, style の役割、必要性が解った	14 (22)	16 (25)	31 (49)	2 (3)	0 (0)
14	Case study の課題は良かった	8 (13)	10 (16)	39 (62)	4 (6)	1 (2)
15	安藤忠雄の教材&Project は有益だった	14 (22)	15 (24)	23 (37)	9 (14)	2 (3)
16	Brainstoriming, inverted-pyramid などのvisual 作業はwriting に役立った	9 (14)	21 (33)	26 (41)	5 (8)	2 (3)

(注) 11: 1名無回答

資料5 授業評価アンケート（回答数63 12.7.7実施）

セメスタープロジェクトでは建築専攻の学生のみならず多くの学生が人生観、職業観、人間的な部分で共感・共鳴を覚えた様子だった。同氏の生き方が新鮮かつ何らかの励ましをもたらす一方、特定人物の生き様について多面的かつ洞察的に思考する訓練が養われたというコメントもあった。結論として単調な繰り返し作業を敢行したコースながらも以下の感想が寄せられた。概括すると：

- *自分自身にも解りにくい文章があったことに気づいた
 - *まだ自分の英語力に自信がないのに他人の文を editing していいのかと当初は迷ったが、お互い様と思うと相手の特徴が解る気がしてきた
 - *他の講義とは違い、他人に批評されることで理解が深まったり、考え方が広がったりした
 - *文章を読んで考える事もまれだったが、editing 作業で考える訓練もし、また style を簡潔にする方法なども知った
 - *第3者がどう思うかがわかった一方、自分の思った通りに人には伝わらないことを理解した
 - *各パラグラフで何を言いたいのか考えるようになった
 - *brainstorming などは視野が広がり、その分、考える力もついた
 - *今までの英語と違い、辞書を調べても考えなければ課題をこなせなかった
 - *普段、ただ聞いて板書を写すだけの講義が多々ある。が、本当に脳を使っている気がこの授業ではしたのでやりごたえがあった
 - *とにかく毎回考えなければならないのでいやでも養われる。それが課題という半強制的なものだったからこそ最終的にはいい結果につながった
 - *読み手に対する認識・洞察力が増した
 - *考えれば考えるほど文章に深みが出てくる気がした
 - *今まで文章を簡潔に書こうという努力をしなかったが、簡略化することで洞察力がついた
- などである。中には「最近新聞を興味深く読むようになった」という予想外のコメントも入っていた。

8. 結語

最初の講義時にアンケート（このコースへの要望）をとった。その中で「建築のプレゼンテーションパネルに書くような、端的でありながらメッセージインパクトを与える簡潔な文の書き方を知りたい」という答えが寄せられ、その「真意」を感慨深く推察した。というのも、今日の日本人学生たちが逃してきた（教育されてこなかった）コミュニケーション能力・表現能

力育成の機会が未だに不十分である、という事実がそこに包含されているからである。物事を整理し、論理立てて説明していく表現・思考訓練が不足していること、とりわけ欧米論理に則った形での思考プロセスに不慣れであること。また、そういった論理的思考を進めるアンチテーゼとして、物事（例えばクラスメートの課題など）を批判的に捉え、意見を述べる態度、逆に批判され、そのことを考えてみる訓練、習慣が今の学生たちに明らかに欠落しているという否めない事実。教える側の責任も含め、原因は様々考えられよう。が、これらの基本的コミュニケーションの訓練、体験なくして欧米人に伝わるプレゼンテーションは確立し得ないと思う。

自分たち個々の思考、ライティング上の習癖、問題点をまず理解し、その上で西洋論理に則したコミュニケーションスタイルを学習していくことが肝要である。機械的にいくつかのスタイルを暗記し、そのパターンに合わせて論理展開を行っても「考えた結果のコミュニケーション」として欧米読者には映らないだろうし、本当の理解も得られないであろう。

[注1]

学生の表現・思考能力の低下に危機感を募らせ、日本語授業を開講する大学が出てきている。詳細は日本経済新聞掲載記事「大学で増える日本語授業、表現力低下に歯止め」（1999年5月13日付）を参照。

参考文献

- [1] J.M.Williams:Style - Ten Lessons in Clarity and Grace(6thed),Longman(1999)
- [2] L.Flower and J.Ackerman:Writers at Work, Hartcourt Brace & Company(1994)
- [3] R.Lanham:Revising Prose(4thed),Ally&Bacon (1999)
- [4] 刈谷 剛彦：知的複眼思考法，講談社(1996)

著者紹介

金岡 正夫
1996年 インディアナ大学大学院修士課程修了（ジャーナリズム）
1999年 マサチューセッツ大学大学院修士課程修了（プロフェッショナルライティング）
現在 鹿児島工業高等専門学校助教授
鹿児島大学非常勤講師